香月千紘、十六歳。

物心ついた時からたった一人の兄弟に嫉妬していた。要領が良く、成績が良く、明るくて周囲から愛される二つ 歳上の兄に。

理由は単純だ。家でも学校でも兄と比較され続け、うんざりしたから。 兄自身に恨みがあるわけじゃない。むしろ彼は自分に甘く、理想の兄の代表のように優しかった。 欠点なんて見当たらない、完全無欠な少年。だからこそ死ぬほど嫌っている。

そしてその醜い感情を悟られないよう生きる。息が詰まりそうなほど、窮屈な世界で。

「千紘、今日期末テストだったんだろう？ どうだった？」

ある日の夜、家でテレビを見ていると仕事から帰ってきた父が尋ねてきた。まぁまぁかな、と適当に返した。本音は「微妙」。これに尽きる。

そんなことも知る由もなく、父は満足そうに頷いた。

「そうか。それなら結果が楽しみだな。麻緋もこの前のテストはクラスで一番だったらしいし」

麻緋。父が一番自慢に思っている息子の名。

非の打ち所のない兄だ。本当に同じ血が流れてるのか、思うほど自分と彼は人種が違う。 母は俺が物心つく前に家を出て行った。だからウチは長いこと父子家庭だ。

……そのわりには、俺達親子が交わ す会話の内容はすごく薄っぺらい。 多分、自分が全部嫌ってるせいだ。毎日のように褒められる兄も、兄を贔屓にする父も。 助け合って生きてる実感なんてない。高校を卒業したら早くこの家を出て、一人で生きていこうと強く思ってい る。逆恨みしているのは間違いないけど、修復不可能なまでに歪んだ心の問題だった。 自分に関心が向かない環境がつまらない。そんな、甘ったれた不満に支配されている。

「ただいま」

夕方千紘が学校から帰ると、リビングで麻緋が誰かと電話をしていた。

「……うん、じゃあ日曜日、十時に駅前で。楽しみにしてる」

わずかに聞き取れた台詞に妙な違和感を覚え、部屋の入口で立ち止まってしまった。そのせいで麻緋がこちらに 気付き、歩いてくる。

「おかえり、千紘。今帰ってきたの？」

「うん。……何、彼女と電話？」

胸の内の疑問を口にすると、麻緋はわかりやすいぐらい頬を赤くした。

「あはは……頼むから父さんには絶対言うなよ。まだ早いとか、勉強に専念しろとか言うだろうからさ」

「うん。分かった」

友達が多い上に彼女もいる。やっぱり持ってるものが違いすぎる。

「……言わないよ」

はぁ……。 麻緋と別れて自分の部屋に戻ってからも、ボーッとしながら椅子に座っていた。麻緋と自分は全然違う。 顔だけは……唯一、ちょっと似ているのかもしれない。父には似てないから、多分自分達の切れ長な瞳は母さん 似。 でも麻緋の視界に俺は入ってない。俺はいつもあいつのことで頭がいっぱいなのに、何でこんなにも違うのか。

……ってやめよう、こんなこといつまでも考えんの。 他者を貶して自我を保つなんて、落ちる所まで落ちた醜い行為だ。麻緋のことは一回頭から消して、その日は眠 りについた。

「はい、この前のテスト返すぞー」

それから少し経って────学校で、担任の古河先生から回答用紙を受け取った。 「香月。前より点数落ちてるから、次は頑張れよ」 彼の言うとおり、今回のテストはとてもじゃないが良い結果とは言えなかった。父には見せたくない点数だ。

「はぁ～……」

憂鬱。家に帰り、そのテスト用紙を父に見せると案の定小言を言われた。

「お前、ほんとに勉強したのか」

「し、したよ。一応」

父は同級生の親より若い方だから、怒るとそれなりに怖い。

「まだ一年だからって油断してると、進路のときに泣きを見るぞ。麻緋はもう希望の大学の合格ラインに入って るんだから」

また、麻緋の話。いつもいつもいつも。

「そうだ、今度の休みに麻緋に勉強を教えてもらったらどうだ。そうすればもう少し良い点がとれるはずだから」

本っ当イライラする。何で俺の話をしてんのに麻緋の話に切り替わるのか。すぐに移り変わる関心は、自分の存 在なんてどうでもいいと言ってるみたいだ。 千紘は、後ろに回した拳を痛いほど握りしめた。 麻緋に勉強を教えてもらえ、か。

「……無理だよ。麻緋、今度の休みは遊びに行くって言ってたし」

確か、お熱い仲の“カノジョ”と。

「そうか。ならしょうがない。自分で復習するんだな。麻緋みたいに遊びに行きたかったら、少し本気出して勉 強しろ」

そこで話は途切れた。ずっと先の突飛な考えで、もう進学じゃなくて就職したい。こんな家にずっといなきゃい けないとか考えたら発狂モンだ。早く、……早く出ていかなきゃ。 週末の日曜日は、父の言うとおりに自分の部屋で勉強をしていた。

もっとも好きな動画を見ながら片手間にやる 感じで、完全集中ではないけど。 夕方ごろ、部屋の外で音がした。 麻緋が帰って来たのかな。遊びに行ったわりにはずいぶん早い帰りじゃないか。不思議に思ったものの、また勉 強に取り掛かった。 それから一時間、さすがに座りっぱなしで腰が痛くなった。飲み物を取りに部屋を出た時、やっぱり麻緋に勉強 を見てもらおうか……と少し迷った。 いつも彼を避けてるから、最近はまともな会話をした覚えがない。昔はそれこそ苦手な問題を見てもらうことが あったけど、いつしか勉強の話は絶対出さなくなった。 彼とちゃんと話す良い機会かもしれない……。 深呼吸して、麻緋の部屋のドアノブに手をかける。ノックをしようとしたその時、中から聞こえた声に手が止ま った。

「あっ……ん、イく……っ！」

心臓が止まりそうになった。家の中で“それ”を聞くなんね有り得ない。

でも聞き間違いなんかじゃなく。男の、 喘ぎ声。 淫らに喘ぐ、麻緋の声だった。

……え？

駄目だと思うのに身体は勝手に動く。音を立てないように、わずかにドアを開けた。その先にあったのは、麻緋と、知らない少年が激しいキスをしている光景。白い蜜を口元から零し、腰を揺らしている。 衝撃的だった。男同士ということもそうだし、身内のそんな姿を生で見るのは初めてだから。

やば……っ。

何で？

疑問と混乱が頭の中を攪拌する。麻緋も相手の少年も気持ちよさそうにしている。お互い一心不乱で、こちらに 気付く気配はない。 驚きに支配されていたが、思考は徐々に解けていく。

麻緋は、男が好きなんだ。

完璧な彼の異常な一面を知った。それに怖いぐらい満足している。 はっ。ざまーみろ。 千紘は静かにスマホを取り出して、彼らの姿を画面に映した。 翌日の夜、父から飲み会で遅くなると連絡があった。

「千紘、夜飯カレー作ったから食べよう」

「あ、うん……ありがとう」

麻緋は台所に立ち、チキンカレーをよそってくれた。 俺は洗濯や掃除はするが料理が苦手の為、麻緋が炊事担当になっている。だから千紘は麻緋の作るご飯を食べて 育った、と言っても過言じゃない。 麻緋が優しいことは嫌というほど分かっている。だから尚さら、心を掻き乱された。

「……美味しい」

「そ？ 良かった、おかわりあるから食えよ。お前はまだ育ち盛りなんだし」

目の前に座り、綺麗な笑顔で見つめてくる兄。 宝物のように輝く自分の理想。大事だからこそ、大好きで、憎くて、グチャグチャに壊したくなる。

────そんなことを考えてる、俺は本気で狂ってる。

「ねぇ、麻緋」

「うん？」

食事が終わった後、千紘はスマホを取り出した。

「麻緋って彼女いるんだもんね。じゃあ女が好き？」

「何だよ急に。当たり前だろ」

「そうなんだ。じゃあこれって、……普通じゃないよね」

フォルダからある画像を開き、麻緋に見せつける。

「それ……」

麻緋が自分の部屋で、男と抱き合っていた写真を。

「この前の休みに部屋でシてたでしょ？無音で撮ったから全然気付いてなかったけど、俺見ちゃったんだ」

麻緋は黙った。 怒っているのか、はたまた動揺しているのかは分からない。ただ無表情で唇を引き結んでいる。 単純に冷静を繕ってる可能性もある。そう思うと最高に気分が良かった。画面の中の、女みたいに蕩けた顔をし てる彼よりはよっぽど男前だ。

「びっくりしたなぁ。彼女と遊んでると思ってたのに、まさか男と部屋でシてるなんて。完璧な兄がホモとか、 俺ＢＬ漫画でしか見たことないよ」

ここぞとばかりに煽ってみる。あ、つうかこの煽り方もＢＬっぽいな。

「……そうか。じゃあそんな写真、持ってるのも気持ち悪いだろ。消せば？」

しかし千紘の煽りも意に介さず、麻緋は呆れた様子でため息をついた。 全然動じてない。その余裕綽々な態度が余計に腹立つ。

「別に。気持ち悪いっていうか、面白いって方が勝つね！麻緋のやばい性癖がわかったわけだし」

ほら、早く。動揺してみろよ。

「……父さんに言ったらどうなっちゃうのかなぁ？」

息が当たりそうなほどの距離で、笑いながら囁く。 直後、手に衝撃が走った。

「……？」

物が落ちた音。一瞬何が起きたのか分からず呆然としたけど、手に持っていたはずのスマホがない。

……ゆっくり視線を横へずらすと、それは無残な姿で足元に落ちていた。

「なっ……何すんだ！？」

スマホを叩き落とされたんだと気づいた時にはさすがに怒鳴った。慌てて拾い上げようとする千紘より先に、横 をすり抜けた麻緋が容赦なくスマホを踏み潰す。

「……！！」

自分のスマホを踏み潰される気持ちをどう形容すればいいのか分からない。画面はひび割れて、確実に修理に出 す必要があると思った。驚きと怒りに震えながら、麻緋に詰め寄る。

「し……信じらんねぇ！ お前、頭おかしいんじゃねえの！？」

「うるさいな……心配しなくても、新しいスマホなら買ってやるよ」

弁償云々の話だけじゃないのに、麻緋は全く悪びれず、平然とこちらを見返している。 くそっ、何だよこいつ！

「もうムカついた……！証拠がなくても、お前が男とヤッてたことは絶対言ってやるからな！」

壊れたスマホを拾って、自分の部屋に戻ろうとした。が、後ろから襟を掴まれて逆方向に連れていかれる。

「ちょっと、何だよ！ 離せ！」

壁を掴んで抵抗したけど、強い力で引っ張られてはどうにもならない。そんなに体格差があるわけじゃないのに、 麻緋の力は強かった。

「痛っ！」

乱暴にベッドに押し倒される。連れられた先は、久しぶりに見る麻緋の部屋だった。

「なっ……何？怒ってんの？ 逆ギレもいいとこだろ、男なんかとセックスしてたお前がおかしーんだから」

またまた頑張って煽ると、麻緋は内側からドアの鍵をかけた。 あれ。もしかして、結構やばい状況なんだろうか。

「千紘。お前、男どころか女ともシたことないんだろ？だからこういう事に喜んで首突っ込みたがる」

麻緋は薄ら笑いを浮かべてる。憤りとは違う表情。だけど本当の感情も読み取れなくて、鳥肌が立った。

「まだ……って何だよ。自分はもう経験豊富だからみたいな上から目線か」

「まさか、偉いわけないだろ。回数なんて言うもんじゃない。隠すべきだよ」

麻緋の言葉は、正直よく分からなかった。意味は分かるけど、その真意の奥にあるものまでは。

「お前はまだこんなこと知らなくていい。だから俺のことも、父さんには絶対に言うな」 「ハッ。やだね！」

回りくどく言ってるけど、単純に父さんに知られたくないだけだろうが。完璧な自分の印象が崩れるのが嫌だか ら。麻緋も結局他人の評価を気にする人間なんだと安堵し、心の中で嘲笑ったけど。

「そう。じゃあしょうがないな。お前は、俺が汚して。……守ってあげるよ」

汚して、守る。 どういう意味だろう。麻緋の台詞を頭の中で反芻してる最中、また強引に押し倒された。今度は完全に寝転がる 形でシーツに沈む。 こんな非常時になんだけど、麻緋の香りがした。何年ぶりか分からない、すごく懐かしい香り。昔はこのベッド で二人で寝たことがあったっけ。 今も……でも、今はちょっと、寝るの意味が違う。

「千紘、少し大人しくしてろよ」

麻緋は自分が締めていたネクタイを外すと、千紘の両腕に巻き付けきつく縛った。

「何して……！」

さすがに恐怖心が募る。暴力……じゃない、これは……。 麻緋の手際は恐ろしいほど良かった。ベルトを外され、簡単に下着ごとズボンを下ろされる。数年ぶりに、兄に 成長した裸体を見られてしまった。 それだけで気が狂いそうなほど恥ずかしくて、さっきまでの自分の言動、行動全てを後悔した。

「……何する気だよ」

「わかってるくせに。まぁお前が嫌がることはしたくないけど、ちょっと我慢しろよ」

麻緋は棚からローションを取り出す。

「父さんに言おうなんて、絶対思えないようにしてやる」